

学位論文

リーディング指導における翻訳指導の効果に  
関する実証的研究

広島大学大学院教育学研究科

文化教育開発専攻

辰 己 明 子

## 論文要旨

本論文は、リーディング指導における翻訳を用いた指導の提案を目指し、翻訳と英文和訳の定義を示した後に、以下の3点について論じている。1点目は、学習者に小説を翻訳課題（英語から日本語）として与え、学習者により産出される訳文を評価する翻訳プロダクト評価尺度を作成することである（調査1）。2点目は、翻訳指導の効果を量的に検証するため、学習者により産出される訳文を、小説の翻訳プロダクト評価尺度を用いて、翻訳指導の効果を明らかにすることである（調査2）。3点目は、翻訳指導の効果を質的に検証するため、翻訳指導前と翻訳指導後での学習者により産出される訳文に見られた変化を明らかにすることである（調査3）。研究の背景としては、近年、外国語教育における翻訳の使用について再評価が行われている中、日本の英語教育においても、英文和訳ではなく翻訳を用いて指導を行う提案がなされているものの、翻訳と英文和訳の定義が十分になされていないため、翻訳を英語教育に用いることの意義が示されてこなかった。また、翻訳指導の効果を実証的に検証する研究についても十分になされてこなかった。加えて、これまでの先行研究において、翻訳を評価する翻訳プロダクト評価尺度の主観的な評価基準が問題として指摘されている。そこで本論文では、翻訳と英文和訳を定義上区別し、教室内での使用を目指した小説の翻訳プロダクト評価尺度を作成し、大学生を対象に、翻訳指導を行い、翻訳指導前・翻訳指導後に産出された学習者の訳文を比較し、量的・質的に見られた変化を検証した。

### 1. 翻訳と英文和訳の定義について

本論文では、英語から日本語への翻訳に焦点をあてている。これまでに、日本の英語教育では、翻訳と英文和訳の定義が十分になされないまま議論がなされてきた。これまでの先行研究においては、Jakobson (1959) により示された翻訳3種類の1つである、言語間翻訳 (Jakobson, 1959) の観点から、翻訳と英文和訳を同一のものとして捉える傾向にある。

表1 Jakobson (1959) による翻訳3類型

翻訳3類型	定義
Intersemiotic Translation (記号間翻訳)	ある記号を別の記号で表現する
Interlingual Translation (言語間翻訳)	ある言語を別の言語に置き換える
Intralingual Translation (言語内翻訳)	同一言語内で言い換えをする

しかし、翻訳と英文和訳の違いは、以下の2点により示すことができる。1点目は、英文を読む力を教師に示すことを目的としているか、2点目は、コミュニケーションを仲介する能力を担うか否か、である。

1 点目は、英文和訳の目的とは、学校教育において、教師が学習者の訳文に点数をつけ、原文の語句や文構造を学習者が理解できているか確認することであり、原文の内容を伝えることを目的とする翻訳とは異なることである（山岡, 2001, p. 118）。

2 点目は、Council of Europe (2002) により、翻訳は、言語活動に必要とされる 4 つの能力の中の 1 つ、コミュニケーションの仲介能力として示されたことである。対して、英文和訳は、原文の意味を考へることなく、原文の表面を忠実に訳すことのみを焦点をあて、翻訳の持つコミュニケーションという視点はない。これらの違いを踏まえ、本論文では、翻訳と英文和訳を以下のように定義する。

翻訳：原文の語句や文構造を的確に理解し、文脈に応じて訳語の選択がなされ、原文の内容を第 3 者（読み手）にわかりやすく伝えること。

英文和訳：原文の内容を考へず、記号レベルでの解説と表層的な記号変換を行うこと。

## 2. 調査 1 について

本調査の目的は、大学生を対象とし、教室内での使用を目指し、妥当性と信頼性の伴った小説の翻訳評価プロダクト評価尺度を開発することである。これまでの翻訳研究における、翻訳プロダクト評価にまつわる問題として、評価基準が設定されていないため評価者による主観的な評価が指摘されている（House, 2001; House, 2009, p. 225）。これまでに、日本人英語学習者を対象とし、翻訳課題を小説と設定した場合、学習者により産出される訳文を評価する小説の翻訳プロダクト評価尺度の作成は、十分になされてこなかった。これまでに、石原（2009）により、日本人英語学習者を対象とした翻訳プロダクト評価尺度、評価項目セット（表 2）が作成された。

表 2 評価項目セットの各観点と項目（石原, 2009）

観点	項目	項目内容
A. 正確さ	1	原文の語彙や文法を正しく理解して訳している
	2	原文の文の繋がりや段落の構成を正しく理解して訳している
	3	原文の伝える情報や作者の意図を正しく理解して訳している
B. 分かりやすさ	4	必要に応じた言い換えや省略、補足などがなされている
	5	訳文の一文一文が日本語として自然である
	6	訳文全体が読者にとって分かりやすい
C. 適切さ	7	原文の文脈に即して訳文の語や表現を選択している
	8	訳文の文体が一貫している
	9	テキストのジャンルや目的に応じて訳している

石原は、大学生に小説を翻訳課題として与え、大学生により産出された訳文を評価者である大学院生による評価結果をもとに、評価項目セットの妥当性と信頼性を検証した結果、この翻訳評価プロダクト評価尺度の妥当性と信頼性は確認された (Ishihara, 2009; 石原, 2009)。しかしながら、小説を翻訳課題とした場合、評価項目セットの高い信頼性は確認されなかった。その理由として、評価項目セットの限界点として、①各項目に対する評価基準が設定されていないこと、②評価項目に対する小説の特徴に関する項目が含まれていないこと、③専門家による妥当性の検証がなされていないこと、の3点が挙げられる。先行研究での限界点を踏まえ、本論文では、石原の評価項目セットをもとに、教室内での使用と妥当性と信頼性の伴った小説の翻訳プロダクト評価尺度の作成を目指し、「正確さ」、「分かりやすさ」、「小説の特徴理解」の3つを観点として設定し、各観点に対して2つずつの項目（全6項目）と各項目に対する評価基準を設定し、作成した。

表3 小説の翻訳評価項目（完成版）

観点	内容	項目
A. 正確さ	起点テキスト(原文)の内容が正確に理解して訳している	1. 原文の語彙を正確に理解して訳している 2. 原文の文法を正しく理解して訳している
B. 分かりやすさ	訳文がわかりやすく、原文の文脈や想定される読者(大学生)を考慮して訳している	3. 訳文の一文一文が、文脈に即して分かりやすい日本語で訳している 4. 全体の文章を、文脈に即して分かりやすい日本語で訳している
C. 小説の特徴理解	作品中での作者の意図を理解して訳している	5. 登場人物についての描写を理解して訳している 6. 登場人物の状況描写(場面)を理解して訳している

\*「分かりやすい日本語」とは、首尾一貫性と一連の文法的に独立した文を結びつけた筋の通った、読み手の理解を助けるよう配慮された日本語と定義する(染谷, 2010)。

本論文では、作成した小説の翻訳プロダクト評価尺度を翻訳と英語教育の専門家による内容的妥当性の検証、学習者による表面的妥当性の検証、筆者を含む3名の英語教員による信頼性の検証、を実施した。その結果、本論文で作成した評価項目の妥当性と信頼性は確認された。

### 3. 調査2について

本調査の目的は、翻訳指導の効果を量的に検証し、その効果を明らかにすることである。本調査で実施した翻訳指導は、文章理解モデルを援用した日本人英語学習者の翻訳プロセス(図1)をもとに、英文和訳から翻訳への転換を目指した。

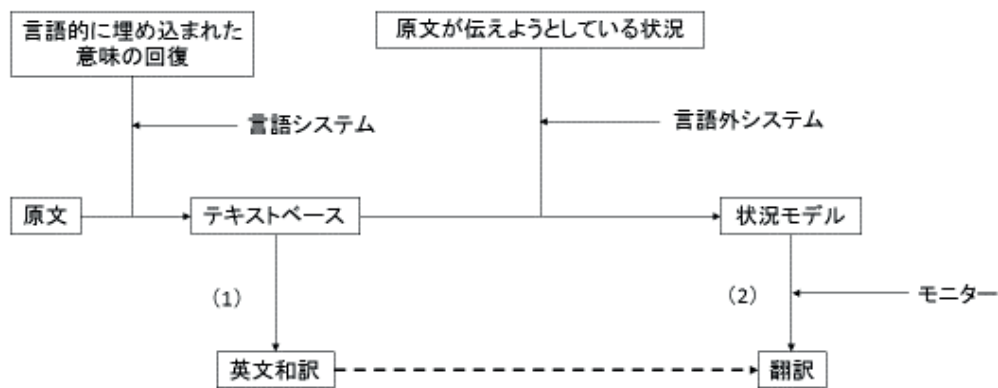


図1 日本人英語学習者の翻訳プロセスモデル

注) 染谷 (2010) による翻訳プロセスモデルをもとに筆者により作成されたもの

前傾の図では、日本人英語学習者の英文和訳と翻訳を訳出するまでの過程を示している。英文和訳を産出するルート (1) では、学習者は原文を読み、原文の表面的な意味を理解しテキストベースを構築する。その際には、学習者は、原文の内容を理解するために、言語システム（レキシコンと語彙）を参照し、辞書的に対応する訳語をあてはめ、理解した内容がテキストモデルである。ルート (1) の英文和訳では、学習者がテキストベースでの内容をそのまま訳出することを示している。対して、翻訳を産出するルート (2) では、テキストベースでの理解をもとに、学習者の既有知識や推論を加えて、より精密な表象、状況モデルを構築し、訳文が産出される。ここでは、ルート (1) と異なり、翻訳として産出される前に、学習者は自分の訳が理解可能かどうかをモニターした後に、翻訳として産出される。本論文で実施した翻訳指導では、この文章理解モデルを援用した日本人英語学習者のプロセスをもとに、英文和訳の問題である①学習者は、代名詞の理解せずに訳出すること、②読み手にとり日本語として分かりにくい訳文を学習者は産出すること、この2点に焦点をあてて翻訳指導を実施した。

翻訳指導対象者は、私立大学にて2014年度後期に、週1回の必修の一般英語授業を受講する大学1年生35名であり、TOEIC Bridge スコアは90点前後（TOEIC スコア230点前後）であり、学習者の大半は英語を苦手としていた。翻訳指導材料は、学習者にとり理解可能な語彙レベルであることを考慮して、*Tuesdays with Morrie*（「モリー先生との火曜日」）を使用した。各翻訳指導時間を約30分設け、学習者に翻訳課題ワークシートを配布し、それら翻訳課題ワークシートに沿って全7回の翻訳指導翻訳指導（表4）を実施した。翻訳指導を、以下の2つの手順で進めた。

- (1) 大半の学習者は、英語を苦手としていたことから、翻訳指導を行う前に、学習者が、宿題として課した翻訳課題ワークシートに取り組み産出された訳文と教師による英文和訳例を参考に修正する時間を設け、学習者に修正訳を求めた。その理由として、学習者は英語を苦手としていることから、文法や語彙の意味を十分に

理解していないことを考え、翻訳指導前の学習者の訳文を教師による英文和訳例をもとに修正させることで、学習者の訳文の統制を試みた。つまり、学習者のテキストベースでの理解をある程度同じものにさせ、そこで産出された英文和訳を土台として、翻訳指導を実施した。学習者の訳文の質の統制をしてから翻訳指導を実施するという手順は、染谷による翻訳指導では行われていない。本章での学習者は、英語を苦手としていることから、学習者間での訳文の質の差を少なくするためにも、学習者が宿題で産出した訳文をもとに、教師による英文和訳例を参考に訳文を修正させ、学習者の訳文の質を統制した後に、翻訳指導を実施した。

- (2) 状況モデルを経て訳を産出することができるよう翻訳指導を行い、学習者は、(1)での訳文を、文脈の意を汲んだ訳語を選び、読み手にとりわかりやすい日本語で書かれた訳文へと転換することを求めた。

表4 全7回の翻訳指導内容

	翻訳指導内容
第1回	英文和訳と翻訳、小説のあらすじと背景について説明した。
第2回	翻訳課題ワークシート1(太字部分)の文法説明を行なった。 宿題：翻訳課題ワークシート1全体を読ませ、太字部分を英文和訳させた。
第3回	宿題での訳文を教師による英文和訳例を参考に修正させた。 ① 翻訳指導として、以下を指導した。 ・文脈(登場人物は誰なのか、誰が誰に対して語りかけているのか)の内容をイメージしながら、読み手にとりわかりやすい日本語で表現すること。 ② 上記の翻訳指導後、修正訳をもとに翻訳を目指し訳させた。 ③ 翻訳させた後、学習者同士の翻訳を読み比べるペアーワークをさせた。ペアーとなった相手の訳文を読んだ感想を、学習者に書かせた。
第4回	① 前回の授業の復習後、翻訳課題ワークシート1の下線部を用い、以下の3点に注意して代名詞の指導を行った。 ・代名詞が何を指しているのか、明らかにすること。 ・代名詞を訳出する際は、文脈に応じて訳すこと。 ・代名詞を訳出する際の以下の1)と2)に注意して、どちらが読み手にとり、よみやすい訳文であるかを考え、代名詞を訳出すること。 1) 文脈により、代名詞を訳さない方が、読み手にとり、訳文が読みやすい場合があること。 2) 代名詞をそのまま訳した方が、読み手にとり、訳文がわかりやすい場合があること。(例：heを「彼」と訳す) ② 翻訳課題ワークシート1の太字部分を各自再度翻訳させた後、全員で太字部分の翻訳を確認した。

表4 全7回の翻訳指導内容（続き）

第5回	これまでの授業の復習後（主に、翻訳をする際のポイント、主語と代名詞の把握など）、翻訳課題ワークシート2の文法説明と内容理解を行なった。 宿題：翻訳課題ワークシート2全体を再度読ませ、太字部分を英文和訳させた。
第6回	①宿題での訳文を教師による英文和訳例を参考に修正させた。 ②翻訳指導として、以下の3つを指導した。 ・誰と誰の対話なのか。 ・主語は誰を指しているのか。代名詞は誰を指しているのかを明らかにすること。 ・文脈全体を読み、わかりやすい日本語で翻訳すること。 ④翻訳指導の内容を踏まえ、学習者に各自の修正訳をもとに、翻訳を目指し、翻訳課題ワークシート2の太字部分を訳させた。
第7回	翻訳家別宮貞徳による訳書「モリー先生との火曜日」の『最初の火曜日—世界を語る』を配布し、第1回目から第6回目翻訳指導の中で、各自で取り組んだ翻訳とプロの翻訳家との翻訳を比較させた。最後に、これまでの翻訳指導を受けての感想を学習者に求めた。

翻訳指導の効果を検証するために、翻訳指導を受けた35名の学習者に対して、事前・事後テストにおいて、村上春樹作「かえるくん、東京を救う」の英訳、*Super Frog Saves Tokyo*の冒頭部分を翻訳課題として使用した。事前テスト・事後テストにおいて、データに欠損のない11名の学習者の訳文を、小説の翻訳評価項目により評価した結果を以下に示す。

表5 項目ごとの事前・事後における5件法による評価の平均値と標準偏差（N=11）

	事前		事後	
	M	SD	M	SD
1. 原文の語彙を正確に理解して訳している	1.64	.92	2.18	1.08
2. 原文の文法を正しく理解して訳している	1.73	.65	2.18	.87
3. 訳文の一文一文が、文脈に即してわかりやすい日本語で訳している	1.91	.70	2.18	.87
4. 全体の文章を、文脈に即してわかりやすい日本語で訳している	1.82	.98	2.36	1.12
5. 登場人物についての描写を理解して訳している	2.18	.87	2.36	1.12
6. 登場人物の状況描写（場面）を理解して訳している	2.00	.77	2.36	1.03

事前テスト結果と比べ、事後テストでは、全項目において、学習者の訳文に改善がみられたことから、文章理解モデルを援用した翻訳指導の効果を確認できた。事前テストにおいて学習者により産出された訳文を比較すると、事後テストにおける学習者の訳文は、翻訳課題の意味内容を把握し、全体として筋の通った、読み手にとり、分かりやすい日

本語で産出されていた。課題点として、①調査対象者の人数を増やすこと、②翻訳指導の効果を実験群と統制群を設けて検証すること、③学習者の国語力を測るテストの実施すること、が挙げられる。

#### 4. 調査3について

本調査の目的は、翻訳指導によって、学習者の訳文にどのような質的变化が見られたのかを明らかにすることである。全7回の翻訳指導で学習者に配布した翻訳課題ワークシート1（第1回から第4回）と翻訳課題ワークシート2（第5回から第7回）で、学習者の訳文に見られた変化を分析し、その変化を明らかにした。翻訳課題ワークシート1に関する翻訳指導内容は、①訳語の選択、②代名詞の理解、③一文構造の把握、翻訳課題ワークシート2に関する翻訳指導内容は、①訳語の選択、②代名詞の理解、③対話文の理解に分類し、翻訳指導前と翻訳指導後で学習者の訳文を分析した。分析した結果は、以下の2つにまとめることができる。

- (1) 翻訳指導前の学習者による訳文は、文脈を考えず、一語一句を辞書の訳語をあてはめた不自然な日本語で書かれていた。
- (2) 翻訳指導後の学習者による訳文は、文脈に合う訳語を選択し、読み手（第3者）を意識した日本語で訳文が産出されていた。

上述の学習者の訳文を分析した結果のまとめから、学習者の訳文に見られた変化を日本人英語学習者の翻訳プロセスモデル（図1, p.5）により説明することができる。翻訳指導前では、学習者はルート（1）のテキストベースを経て英文和訳を産出している傾向にあった。この時点では、学習者の訳文は、文法理解がままならならず、学習者間での訳文の質に差が見られた。そのため、教師（筆者）により提示された英文和訳例をもとに、学習者に訳文の修正を求めた。その理由として、翻訳指導を実施するにあたり、学習者のテキストベースでの理解、つまり原文の表面的な理解（文法理解や語彙の意味理解）をある程度同じものにし、学習者に英文和訳を再度産出させる必要があったからである。学習者に修正させた英文和訳を土台として、英文和訳に関する問題の改善を目指し、原文の内容について、学習者に深い理解を促す翻訳指導を行った。その結果、翻訳指導後では、翻訳指導前では学習者の訳文に見られなかった①文法を理解していたこと、②文脈を考えた訳語の選択がなされていたこと、③読み手にとり分かりやすい日本語で訳文が書かれていたこと、が学習者の訳文に見られた。これらの結果から、翻訳指導により、学習者の訳文が、ルート（1）のテキストベースでの理解をもとに産出した英文和訳から、ルート（2）の状況モデルを経て、産出する翻訳へと変化が見られたとすることができる。ゆえに、英文和訳に関する問題と日本人英語学習者の訳出過程を説明する文章理解モデルを援用した日本人英語学習者の翻訳プロセスの適切性と翻訳指導の効果は確認されたと、結論づける。



今後の課題として、学習者の英語力を考慮した上で、翻訳指導で使用する材料を選択する必要があると考える。翻訳指導に関しても、毎回の翻訳指導後に学習者から、改善して欲しい点等を含めた翻訳指導についての感想を書いてもらうといったことを行い、翻訳指導を改善していく必要がある。

## 5. 本論文から得られた教育的示唆について

本論文から得られた教育的示唆として以下の3点を提示した。

### (1) リーディング指導における翻訳指導の提案

本論文で実施した文章理解モデルを援用した翻訳指導は、先行研究で指摘されている英文和訳の問題に対して効果があることが確認されたことから、リーディング指導において、深い読みを促す翻訳を用いて指導することへの提案につながる。

### (2) 教室内での小説の翻訳評価項目の使用の提案

第3章で作成した、小説の翻訳評価項目を活用することで、教師は、客観性を持って、診断的に学習者の訳文を評価できる。

### (3) 国語教育との連携

本論文の結果から、学習者が、母語を介して英語を学ぶことの重要性を確認できたことで、英語教育と国語教育の連携への提案につながる。

## 参考文献

- Albom, M. (1997). *Tuesdays with Morrie: An old man, a young man, and life's greatest lesson*. New York: Broadway Books.
- Albom, M. 別宮貞徳 (訳) (2004). 『普及版 Tuesdays with Morrie モリー先生との火曜日』NHK 出版.
- Albom, M. 新井ひろみ・新井康友・服部昭郎・高梨康雄 (編) (2008). 『Tuesdays with Morrie. モリー先生との火曜日』南雲堂.
- Cook, G. (2010). *Translation in language teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Council of Europe (2002). *Common European framework of reference for languages: learning, teaching, assessment*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- House, J. (2001). Translation quality assessment: Linguistic description versus social evaluation. *Meta*, 46, 243-257.
- House, J. (2009). Quality. In M. Baker, & G. Saldanha (Eds.), *Routledge encyclopedia of translation studies* (pp. 222-225). London and New York: Routledge.
- Ishihara, T. (2009) Developing an analytic evaluation scale for English-Japanese translation: Considering its reliability using generalizability theory. *ARELE*, 20, 171-180.
- Jakobson, R. (1959). On linguistic aspects of translation. In R.A. Brower (Ed.), *On translation* (pp.232-239). Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Tatsumi, A. (2016). *Developing a translation evaluation scale for literature: Considering its practicability in the classroom context*. Manuscript submitted for publication.
- Van Dijk, T. A., & Kintsch, W. (1983). *Strategies of discourse comprehension*. New York, NY: Academic Press.
- Venuti, L. (2000). *The translation studies reader*. London/New York: Rutledge.
- 石原知英 (2009). 「英文和訳の評価：分析的評価尺度の策定と検証的因子分析による妥当性の検討」『中国地区英語教育学会研究紀要』30, 61－70.
- 柴田元幸 (2013). 『翻訳教室』朝日新聞出版.
- 染谷泰正 (2010). 「大学における翻訳教育の位置づけとその目標」『外国語教育研究』3. 73-102.
- 染谷泰正・河原清志・山本成代 (2013). 『英語教育における翻訳 (TILT: Translation and Interpreting in Language Teaching) の意義と位置づけ』 Retrieved from [http://someyanet.com/99-MiscPapers/TILT\\_Symposium 2013.pdf](http://someyanet.com/99-MiscPapers/TILT_Symposium 2013.pdf)
- 辰己明子 (2015). 「大学英語教育における翻訳指導に関する研究：一般英語授業での翻訳指導実践を事例として」『通訳翻訳への招待』13, 67－82. Retrieved from [http://honyakukenkyu.sakura.ne.jp/shotai\\_vol13/No\\_13-004-Tatsumi.pdf](http://honyakukenkyu.sakura.ne.jp/shotai_vol13/No_13-004-Tatsumi.pdf)
- 田中武夫・島田勝正・紺渡弘幸 (2011). 『推論発問を取り入れた英語リーディング指導 深い読みを促す英語授業』三省堂.
- 田中武夫・田中知聡 (2009). 「英語教師のための発問テクニック 英語授業を活性化するリーディング指導」大修館書店.
- 田中敏・山際勇一郎 (1992). 『教育・心理統計と実験計画法』教育出版.

- 谷口篤 (2001). 「文章理解—私たちはどのように文章全体の意味を理解しているのか」 森敏昭 (編著) 『認知心理学を語る 2 おもしろ言語のラボラトリー』 (pp. 75-97) 京都: 北大路書房.
- 鳥飼玖美子・河原清志 (2013). 「外国語教育への応用①: 文法訳読と翻訳」 河原清・斎藤美野・武田珂代子・坪井睦子・平塚ゆかり・山田優・吉田理加・鳥飼玖美子 (編著) 『よくわかる翻訳通訳学』 (pp.102-103) ミネルヴァ書房.
- 西本有逸 (2001). 「テキストの理解とは: テキストの心的表象をめぐって」 門田修平・野呂忠司 (編著) 『英語リーディングの認知メカニズム』 (pp. 173-183) くろしお出版.
- 羽鳥博愛 (1982). 『心理言語学と英語教育』 大修館書店.
- 山岡洋一 (2001). 『翻訳とは何か 職業としての翻訳』 日本アソシエーツ.
- 山田雄一郎 (2006). 『英語力とは何か』 大修館書店.
- 吉田真美 (2001). 『テキストを超えた理解: 読みにおける推論過程』 門田修平・野呂忠司 (編) 『英語リーディングの認知メカニズム』 (pp. 149-162) くろしお出版.